

ジャイナ教における非暴力の哲学的正当化

ジャヤンドラ・ソーニー

翻訳：三澤祐嗣

仏教やヒンドゥー教とは対照的に、ジャイナ教は、あまり知られていないインド固有の世界観である。マハーヴィーラは、ブッダの同時代の紀元前5世紀頃の人物であり、おそらく最も知られたジャイナ教の代表者で改革者である。しかし、仏教徒とジャイナ教徒の資料によると、ジャイナ教の起源は、少なくとも250年前、マハーヴィーラの前駆者であるパールシュヴァに遡る。彼ら2人、パールシュヴァとマハーヴィーラは悟った人と考えられており、そしてそれ故に自身の俗世での束縛を破壊する全知者とみなされ、また、他者にそのような解脱がどのように成し遂げられることができるかについても教えた。彼ら（パールシュヴァとマハーヴィーラ）は征服者あるいは勝利者すなわちジナ（Jina）として知られていて、そこからジナの信者を示すジャイナ（Jaina）という語が導き出された。ジャイナ教徒の一般的な歴史——それは神話の時間を含む——では、そのような24人のジナ達が、異なる時代にこの世に生まれ、「浅瀬もしくは橋の作成者」すなわちティールタンカラ（祖師）としてジャイナ教の教義を教えたものとして言及されている。彼らの教えは、再生の海の上に、すなわち俗世の岸から彼岸へ、または束縛から解放へと架かる橋のようなものである。すべてのジナ達に共通の一つの教えがあるならば、それは不殺生（非暴力）、すなわちありとあらゆる殺生（暴力）の放棄である。

殺生（暴力）は常にインドで生活の一部であった。しかしながら、全く同時に、古代より、不殺生（非暴力）の指示と実践は非常に高い地位を持っていた。仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教といったインドにおいて古代から固有の3つの伝統すべては、しばしば非常に類似した方法で不殺生（非暴力）の思想を普及させた。アヨーディヤーでのヒンドゥー・ムスリム間の衝突について重要な分析を書いたハンス・バック（Bakker 1991: p. 80）は、「普通に平和的で道徳的である以上のものとしての」、インドの文化と社会の「理想化されたイメージ」について語っている。例えば、バックは、バラモン階級の人々は「親切な人種」「幸せな子羊」であり、「彼らの神についての考えは『偉大で美しい』ものであり、そして彼らの『モラルは純粋で高潔である』」と述べているヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）を引用している。他方、インドにおいて戦争や殺生（暴力）がなかった期間は極めて少なかったことは有名である。特に独立運動の間の出来事や、今も進行中のヒンドゥー・ムスリム間の衝突のゆえに、いわゆる指定カースト¹と指定部族に関する問題を含みつつ、上記で言及した「理想化されたイメージ」は一気に崩れた。全く同時に、そしてインド自体において、非常に強い反殺生（反暴力）と不殺生（非暴力）の運動——マハトマ・ガンディーが独立運動の中で不殺生（非暴力）の方法を用い、政治的にもそれを利用したことに似ているのだが——は、常にあった。ついでに注意するが、政治的圧力のために効果的に利用した断食の実行とともに、ガンディーはジャイナ教から不殺生（非暴力）についての考えと極端な強調を引き継いだことが重要である。

ジャイナ教における最高の倫理原則としての不殺生（非暴力）の極端な強調は、形而上学的に実証される。以下で、ジャイナ教徒の形而上学の簡潔な概要を与え、それにより、ジャイナ教において殺生（暴力）と不殺生（非暴力）がいかに重要かを見てみようと思う。ジャイナ教の哲学における7つの基本的な真実は、その存在論の2つの基本的な原理（ジーヴァとアジーヴァ）を伴うだけでなく、ジャイナ教の形而上学全体をも要約するとも言える。ジーヴァ（靈魂）²——感覚／生命や意識そのものの原理——は、様々な点でアートマン（我）やプルシャ（精神原理）と類似している（シヴァ派においてアートマン（我）／パシュ（個我、個々人の魂）がシャクティ（宇宙の根源力）を持つように、ジャイナ教におけるジーヴァ（靈魂）はヴィールヤ（力）を持っている）³。ア

ジーヴァは非感覚〔あるいは非精神、非靈魂〕の原理であり、そしてそれは、それを構成する5つの非感覚のカテゴリを表す。つまりアジーヴァ（非靈魂）は、時間と空間において運動するか停止することができる物質（ブドガラ（物質原子）、アーカーシャ（虚空・空間）、カーラ（時間）、ダルマ（運動の条件）、アダルマ（停止の条件）という5つ）から成る。

不殺生（非暴力）の重要性を理解するための鍵となる用語は、物質（ブドガラ）の役割と機能である。ジャイナ教では、物質は靈魂すなわちジーヴァに「流れ込み」、そして、カルマ（行為、業）に変えられるので、それは重要である。ここでのカルマ（行為）という語は状態を意味し、その状態のもとで靈魂はすべての行動——すなわち、痛みや苦しみ、あるいは楽しみや喜びを引き起こす行動——の結果を獲得する。カルマ（行為）が実は、物質——すなわち靈魂に流れ込んでそれに密着する微細で目に見えない物質——であることは、ジャイナ教に特有である。こうすることによって、微細で目に見えない物質粒子は、靈魂が自由ではなくその本来の能力と機能を発揮することを妨害するほどに、靈魂を覆い、包む。明らかに、靈魂があらゆる妨害から解放されて、その生来の能力に従って妨害されないよう機能することができるために、これらの微細で目に見えない物質粒子の重荷から靈魂を清めるか浄化する必要がある。この物質の重荷から靈魂を開放するために、ジャイナ教徒たちは、普通の個人にとって非常に厳しいものであるが、定期的に長い期間にわたる断食のような禁欲的な浄化の実修を規定している（上で見たように、マハートマー・ガンディーはこれも行った）。

さて、基本的な問題は、いったいどのようにしてそのような物質の靈魂への流れ込み／流入が起こるのかということである。

私たちはすでに、ジーヴァ（靈魂）とアジーヴァ（非靈魂）、すなわち最初の2つの根本的な真実と共に、「7つの根本的な真実」に言及した。さて、第3の真実はまさにこの靈魂への微細な物質粒子の流入（アースラヴァ）である。流入は、物質をそれ（靈魂）に引きつける靈魂のいわゆる「活動」により起こる。カルマ（行為）による輪廻転生を引き起こす活動は、どのように最初に起こったのだろうか。仏教徒やヒンドゥー教徒と同様に、ジャイナ教徒も、ジャイナ教における感覚の原理あるいは靈魂の来歴は、無始以来の物質との結びつきから始まり、これによって、本来無制限で無限定な靈魂が物質によって覆われ、妨害され、制限されると言う。さらに、ジャイナ教徒は、カルマと輪廻の理論を受け入れる他の者たち（仏教徒等）と同様の方法で、それはそのようであると単に確かめるだけである。ジャイナ教徒にとって、靈魂は本来完全であり、この完全さは、信仰、知識、振る舞い、力、至福を含む。しかしながら、物質が靈魂に流れ込み、カルマ（行為）へと変化し、靈魂に密着するので、靈魂の本来の能力は縛られる／拘束されるようになる——ジャイナ教徒はしばしば、油が塗られた表面に落ちるちりのイメージを用いる。この束縛（バンダ）こそが、ジャイナ教の第4の根本的な真実である。

しかしながら、物質／カルマ（行為）の流入を防止するという可能性があり、そして、更なる流入の制御（サンヴァラ）の可能性の状態が、第5の根本的な真実である。そのような制御は、例えば、思考、話し、行い（托鉢、慎み、謙遜、そして観察における）の際の注意深さや用心などのような適切な振る舞いを通じて可能である。

第6の根本的な真実は、すでに蓄えられた物質／カルマ（行為）の分離や破壊であり、すなわちその抹消または止滅（ニルジャラー）である。これは、「外部」や「内部」での禁欲生活を通じて、すなわち、断食や、その他の苦行とその他の苦難と難行、そして、学習と瞑想を通じて、成し遂げられうる。

靈魂が完全にすべての微細なカルマの粒子を取り除くことができるならば、あらゆる外部の影響から解放される。この解放が、第7の根本的な真実、すなわち解脱（モークシャ）である。その時、靈魂は、どんな妨害もなしに、その無制限な力（ヴィールヤ）、信仰（ダルシャナ）・知識（ジュニャーナ）・振る舞い（チャーリトラ）の完全さと共に、その本来の性質のもとで自由に存在することができる。

この形而上学的背景は、5世紀以前に書かれたウマースヴァーティ作『タットヴァールタ・ストラ』(Tattvārthasūtra 略号 TS) 1, 1-4 から取られた。

さて、殺生（暴力）と不殺生（非暴力）はジャイナ教における形而上学とどのような関係があるのか。それらの間の関係は何か。それらの間の関係は、私たちが行うすべての行為または振る舞いは、「悪い」カルマ（行為）による恐るべき帰結を伴う大量の物質の、靈魂への流入と蓄積につながる。ジャイナ教徒によると、あらゆる行為は、特にそれが殺生（暴力）や生き物の殺害あるいは破壊を含むならば、靈魂における「悪い」カルマ（行為）に

よる恐るべき帰結を伴う大量の物質の流入と蓄積につながる。殺生（暴力）と破壊を避けることは、最終的に物質が靈魂に流れ込まないための必要条件であり、それによって、従って否定的な帰結を伴ういかなるカルマも展開することができないのである。これは、単純に、私たちが行うあらゆる小さなことにも注意しなければならないということの意味する。

ウマースヴァーティの TS 1, 1 における最初の経文は、ここまで言われたすべてのことを要約している。すなわち、正しい信仰、正しい知識、そして正しい振る舞い／行為は、一緒に解脱へ導く (samyag darśana-jñāna-cāritrāṇi mokṣa-mārgaḥ)。これらの「三宝」（正しい信仰、正しい知識、正しい振る舞い）のうちで、ここで私たちに関係することは、正しい振る舞い／行為であり、そして、これは2つの段階で理解しうる。すなわち、存在論的なレベルで、靈魂は本来、自然に、正しく振る舞い／行為する能力を有している。しかしながら、私たちこの世界の人間にとって、この靈魂の本来の性質はカルマ（行為）によって妨害され、制限されている。それ故に、靈魂がその本来の性質に従って振る舞えるよう靈魂の最適状態を達成するために自分自身を律することが、われわれに要求されている。ジャイナ教徒にとって、このことは、その目的が世俗的生活のそれとは基本的に異なるところの禁欲生活を通じて、可能である。明らかに、この禁欲生活は僧と尼僧に求められるものであるが、ジャイナ教の一般信徒もまた、俗世的生活の中で、正しい振る舞いあるいは行為についての指示に従って自身を順応するよう要求される。基本的に、これは、私たちは不殺生（非暴力）的で、真実を話し、盗まず、貞節で、貪欲であってはならないことを意味する。基本的な心構えは、世俗の目的への執着を解き放つものであるところの、冷静さ（情念のなさ、passionlessness）であろう。〔以下で〕人間の状態に関する見解を簡潔に論ずる際に、ジャイナ教徒のその立場をより良く理解することができる。

人間の状態についてのジャイナ教徒の見方は、仏教とヒンドゥー教における類似した見解と同様に、世俗的楽しみは、絶えず、そして非常に簡単に、私たちがそそのかし、墮落させるという事実を示している。私たちは、これらの喜びや楽しみは一時的なものであり、そして、世俗の脅威はあまねく存在しているという事実をしばしば見落している。この人間の状態は、非常に例証的で、劇的でさえある方法で、「井戸の中の男」という寓話の中で描写されている。この物語は以下のようなものである。

ある男が、大きな森で、野生の象に威嚇された。彼はイチジクの木の方へ避難したが、それに素早く登ることができなかった。そこで、彼はすぐ近くにある、草が生い茂った、古くうち捨てられた井戸に飛び込んだ。彼は、なんとか井戸の脇から伸びている竹の枝を掴んで、すんでの所で、鼻で捕らえようとする象から身を守った。象は彼に触れることはできても、捕らえるまでにはいたらなかった。彼は、大変なパニック状態の中であたりを見回すと、井戸の底で、彼を飲み込もうと威嚇する1匹の大きなへびと、鎌首をもたげてシューシューと音を立てる4匹の小さなへびを見つけた。ひどい恐怖で、彼は、井戸の底に落ちこまないように、竹の枝にしがみついた。どうすべきかと思い見上げると、彼は衝撃を受けた。白いネズミと黒いネズミが竹の根っこをかじっているのを見つけたのだ。さらに、激怒した象がイチジクの木を全力で叩いていた。象の猛攻撃によって激しく揺すられて、木の枝にいた数百もの蜂が危険を察知し、男を刺そうと威嚇しだした。このようにあらゆる面から悩まされ苦しめられた不幸な男は、木から一滴のはちみつが落ちて、彼の額に当たり、鼻をしたたり落ちて、口の中に流れ込んできたことに気づいた。彼は、自分がおかれている災難や不幸のことをすっかり忘れ、意地汚く少量のはちみつをすすり、大喜びでその甘さを堪能した。（〔Glaserapp 1984 : pp. 189-190〕によるドイツ語訳から翻案し、傍点⁴を付け加えた。）

ジャイナ教徒は、あらゆることが悪い方へと向かうある一日を描写したこの劇的な物語から、次のような教訓を引き出す。井戸にいる男はジャイナ教における靈魂を表し、森は輪廻（生まれ・死に・生まれ、などの循環）、木は生命を表し、井戸は人間の境遇を表している。男を威嚇した象は死を表し、大きなへびは地獄を、4匹の小さなへびは4つの激情（怒り、傲慢、欺瞞、貪欲）を、白と黒のネズミは月の明るい部分と暗い部分（＝日中と夜間）をそれぞれ表す。蜂は人がかかる病を表し、そして、最後に、はちみつの一滴は俗世が提供する甘さ・幸せを表す。ちょうどこの井戸にいる男のように、各々の靈魂は、俗世が提供するつかの間の喜びのために、それが置かれ

ている恐ろしい境遇を忘れている。境遇の災難さと悲惨さに気付いたとき、靈魂は、離脱しようと奮起する、つまり、苦しみからの解放のために奮起するのである。

この物語から明らかなことは、ジャイナ教は、俗世において生命は普通苦しみに満ちているという一般的なインドの考え方を共有しているということである。ブッダの *sarvaṃ duḥkham* (全ては苦しみである) と同じように、ジャイナ教徒は *asāraḥ sansāraḥ* (俗世における生命には価値がない) と言う (Glasenapp 1984 : p. 187)。この人間の状態の記述とジャイナ教徒の世界観は、ジャイナ教徒やインドの他の諸〔宗教〕が見るように、いかにして恐るべき人間の状態を逃れるかについての単なる出発点であり、建設的な見解のために必要な第一歩であると分かる。それは「ジャイナ教徒の浄化の道」と解脱に意味と重要性を与える。

井戸の中の男のようなこの恐るべき不幸な境遇にあるのが靈魂 (ジーヴァ) なのであり、すでに見たように、その行いに対して責任を負うのは靈魂そのものである。ジャイナ教におけるいわゆる三宝、すなわち、正しい信仰、正しい知識、正しい振る舞い／行為は、初めは意識されておらずまた同時に不運である状態から解脱するための、道しるべまたは案内人である。ジャイナ教徒は現実主義者であり、彼らは、私たちにとって「正しさ」は自動的に実現されるのではないという事実完全に気づいている。なぜならこの世界における私たちの存在そのものを通じて私たちは実際に、また不可避に、破壊的であるからである。ジャイナ教の僧と尼僧は、世界を捨てて、極端な禁欲を実践することになっている。毎晩、苦行者は自身の良心の細かな審査を経験しなければならない。不殺生 (非暴力) の誓いの黙想の例として、ここで一つの形式を提示しよう (Mette 2010 : p. 212f. ドイツ語からの翻訳) ⁵。

「私は、生物——小さかろうと大きかろうと、動物であろうと植物であろうと——に対するあらゆる種類の害を捨てます。害を加えたいと個人的に思わないことにより、また、私のために他者によって生物が傷つけられることに賛成しないことにより、また、別の人が生物を傷つけることを許さないことにより、私は、生きている限り、3つの方法すなわち私の内的な感覚で、私の言葉で、私の肉体で、〔害を捨てます。〕」次に、苦行者は、5つの注意／規則 (サミティ) を怠ったかどうか、またそれにより彼がこの規則を害してしまったかどうか、自身に尋ねる。最初の注意／規則は歩くことに関してである。僧は地面を見下ろし、持っている小さなほうきで踏んでしまうような小さな生物を〔穏やかに〕掃き除いて歩かなければならない。2番目の注意／規則は言葉に関係している。僧は、軽率に／慌ただしく話した言葉を通して生物を害したかどうか、自身に尋ねなければならない。3番目は、托鉢のとき、何かを見落したのではないか。4番目に、自分の用具を取ったり置いたりするときに何かを見落していないか。5番目に、汚物を取り除いているときはどうか。

ジャイナ教の一般信徒も、もちろん、日常生活の中で不殺生 (非暴力) の「理想」に可能な限り忠実でなければならぬ。次の6人の旅人とマンゴーの木の話は、不殺生 (非暴力) の規則を人間にとっての欲求を満たすことに関連付け、またどのようにして様々なタイプの人々が様々な方法で自身の欲望を満たしているのかを描写し、そしてジャイナ教による靈魂の6タイプを表現している。

6人の旅人が森を抜けようと一緒に歩いていた。数時間たつと、彼らは空腹を感じ始め、まわりに果物の木を探した。しばらくすると彼らはマンゴーの木に遭遇して、それぞれ次のような提案をした。1. 一人の旅人は斧を持っていて、おいしく熟れたマンゴーを得るために、木すべてを切り倒そうと提案した。2. 二番目の旅人は、彼に反対して、マンゴーのためには大きな枝を切るだけで十分であると提案した。3. 三番目の人は、こんなことまでする必要がない、「どうして十分に実がなった一枝を切るだけにしないのか」と言った。4. 四番目の旅人はさらに良い案を持っていて、こんなことさえする必要はないでしょう、私たちが届くところのマンゴーが実った小さな枝を折ることにしませんか、と言った。5. 五番目の旅人はそれに賛成して、良い案だが十分に注意しなければならないと言った。私たちは、その木の熟れたマンゴーのみを採り、青いものは残すということを確認になさなければならないという。6. 最後に、六番目の旅人は言った。私にはもっと良い案がある。ここを見て、木の下を。ここに私たち皆にとって十分足りるだけの熟れたマンゴーがある。ど

んな仕方でも木を傷つけないで、それら（下に落ちているマンゴー）を取りませんか、と。

これは、どうやって私たちが自分たちの環境の中で慎重に、保護的に振る舞うことができるかと共に、どのようにして不殺生（非暴力）が実行されることができるかについて説明する典型的なジャイナ教の物語である。（c/f 『ヨーガ・スートラ』 2, 35：一旦、不殺生（非暴力）が確立すると、彼（ヨーガ行者）の前では〔生き物からの彼に対する〕敵意は捨てられる。）

ありとあらゆる私たちの行動は自身の靈魂に影響することを見た。ジャイナ教の聖典では 13 種類の行為が記述され、そして、それらのうちの 12 種は実際に避けられなければならない殺生（暴力）的行為である。これらの殺生（暴力）行為は、扇動されるべきではなく、支持されるべきでもなく、それだけでなく、賛成されるべきでもないということも強調される。これらの考えは、紀元前 5 世紀のマハーヴィーラの教えから引き出され、遅くとも紀元後 5 世紀ごろに聖典化された（Schubring 1926：pp. 42-48/51-58、その章は p. 65/76 まで続く。『スーヤガダ』（*Sūyagaḍa*）II, 2）。おおまかに、ここでこれら 13 種の行為に言及したい。それはジャイナ教の殺生（暴力）についての見解がどれくらい包括的か、そして、これらの考えがどれほど最初期からジャイナ教徒たちを占有していたかを示すためである。

1. 意図的な殺生（暴力）行為（自身の利益のために、ある人が彼の親類、友人等に、殺生（暴力）をもたらす）。2. 動物の残酷な殺害のような、目的のない殺生（暴力）行為と、意味のない／無益な破壊。3. 武器を用いて自分自身または他人の身を守る場合のような、好戦的な殺生（暴力）行為。4. 別の特定の作業をする傍らで／付随する結果で不意に何かを殺す場合のような、偶然の殺生（暴力）行為。5. 誰かには悪い意図があると誤って憶測することによって害する場合のような、目の錯覚を通じての殺生（暴力）行為。6. 虚偽の言葉で起こる殺生（暴力）行為。7. 許されない取得において〔起こる殺生（暴力）行為〕。8. 憂鬱なときのような（悪い）心持ちで。9. 自惚れての殺生（暴力）行為。10. 小さな間違いで誰かをひどく罰することのように友人を不当に扱うことで。11. 欺瞞での殺生（暴力）。12. 貪欲において。そして、最後に、13. 次のような定められた行為、例えば、話すこと、考えること、歩くこと、立つこと、食べることに慎重になることによる靈魂の幸福など。

結論

私は形而上学から始めた。たとえこれらの哲学的考えはもっと早期に流行っていたかもしれないとも、それに含まれる考えは少なくとも 2 世紀頃から私たちに知られていた。倫理的で実践的な方法で不殺生（非暴力）を弁護するマハーヴィーラの言葉で終わらせようと思う。マハーヴィーラが次のように語ったことがジャイナ教の聖典に記録されている。（『スーヤガダ』（*Sūyagaḍa*）II 1, 48 および Schubring 1926：p. 39/47）

私が棒、骨、拳、土くれまたは陶器の破片で傷つけられるか、叩かれるか、脅かされるか、怪我を負わせられるか、激しく打ち付けられるか、殺されるなら、それは私にとって良くないことである——そう、たとえ私の髪が引き抜かれるだけでも、私は、自分にその苦しみと恐れをもたらす傷害を明瞭に感じる——そのよう



図：6人の旅人とマンゴーの木の寓話
(<http://en.wikipedia.org/wiki/File:Lesya.jpg> より)

に、以下のことを知りなさい。すなわち、あらゆる高等生物、あらゆる植物、あらゆる下等動物、その他のすべての生物は、棒、骨などで傷つけられるか殺されるかしたならば、実に、たとえ彼らの髪が引き抜かれるだけでも、(彼らは) 強烈に、自身にその苦しみと恐れをもたらす傷害を感じる。もし人がこれに気づいたら、あらゆる高次の存在も、あらゆる植物も、あらゆる下等動物も、その他のすべての生物も、叩かれたり、強要されたり、服従させられたり、酷使されたり、あるいは殺されたりがなくなるのは確かである。……これは、知っている人々によって宣言された純粹で、恒常的な、永遠の教えである、……。 (翻案したテキスト)

参考文献

- Bakker, Hans, 1991, "Ayodhyā: A Hindu Jerusalem: An Investigation of 'Holy War' as a Religious Idea in the Light of Communal Unrest in India" in *Numen* 38/1, pp. 80–109.
- Dundas, Paul, 1992, *The Jains*. London/New York: Routledge.
- Glasesnapp, Helmut von, 1984, *Der Jainismus. Eine indische Erlösungsreligion*. Hildesheim/ Zürich/ New York: Georg Olms Verlag. (2. Nachdruckauflage der Ausgabe Berlin 1925).
- Jacobi, Hermann, 1906, "Eine Jaina-Dogmatik. Umāsvāti's Tattvārthadhigama Sūtra", übersetzt und erläutert. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, vol. 60, S. 287–325 (chapters 1–4) and S. 512–544 (chapters 5–10, and a word index).
- Jaini, Padmanabh S., 1979, *The Jaina Path of Purification*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Mette, Adelheid, 2010, *Die Erlösungslehre der Jaina. Legenden, Parabeln, Erzählungen*, aus dem Sanskrit und Prakrit übersetzt. Berlin: Verlag der Weltreligionen im Insel Verlag.
- Schubring, Walter, 1926: *Worte Mahāvīras*. Kritische Übersetzung aus dem Kanon der Jaina. Göttingen: Vandenhoeck u. Ruprecht. Translated into English by W. Bollée and J. Soni, 2004 as *Mahāvīra's Words* (with much added material), Ahmedabad: L. D. Institute of Indology.
- Soni, Jayandra, 1998, "Meditation und Mystik im Jainismus" in Christian Scharfetter and Christian Rättsch (Hgg.): *Religion – Mystik – Schamanismus, vol. 9 Europäisches Collegium für Bewusstseinsstudien*, Berlin: VWB (Verlag für Wissenschaft und Bildung), pp. 15–27.
- 2007: "Hinduismus und die Überwindung von Gewalt" in Hans-Martin Barth und Christoph Elsas (Hgg.) *Innerer Friede und die Überwindung von Gewalt. Religiöse Traditionen auf dem Prüfstand*. Hamburg: EB Verlag, pp. 215–224.

注

- 1 訳者註：従来の「不可触賤民」のこと。
- 2 訳者註：著者はジーヴァの訳語として soul (靈魂) を用いている。
- 3 訳者註：インド思想において、アートマン (我) やプルシャ (精神原理) は純粹で究極的な自己の主体を意味する。シヴァ派とは、ヒンドゥー教においてシヴァ神を中心に信奉する者たちである。彼らの教義において、アートマン (我) すなわちパシュ (個我) は個々人の主体であるが、同時に本質的には最高存在 (主宰神) と同性質であり、宇宙の根源力であるシャクティを具えているという一元論が考えられている。ジャイナ教徒においても、ジーヴァ (靈魂) の本質の一つとしてヴィールヤすなわち力が想定されている。しかし、ジャイナ教は世界を創造する主宰神を認めず、多数の靈魂を認める多我説の立場に立つ。
- 4 訳者註：原文では、傍点の箇所は太字となっている。
- 5 原註：“Ich entsage jeder Schädigung von Lebewesen, sei es fein oder grob, tierisch oder pflanzlich, in dem ich weder in eigener Person Lebewesen schädigen noch zulassen will, daß durch andere in meinem Interesse ein Lebewesen geschädigt wird, noch erlauben will, daß ein anderer ein Lebewesen schädigt, so lange ich lebe, dreifach, auf dreierlei Weise, mit meinem inneren Sinn, meiner Rede und meinem Leib”. Er befragt sich dann selber, ob er eine der fünf (Achtsamkeiten) (*samiti*) vernachlässigt und dadurch eine Verletzung dieses Gebots bewirkt haben könnte. Die erste Achtsamkeit betrifft das Gehen. Der Mönch soll mit auf dem Boden gesenktem Blick gehen, indem er mit einem kleinen Besen, den er mit sich führt, kleine Wesen, die er zertreten könnte, zur Seite fegt. Die zweite Achtsamkeit betrifft die Rede: Er muß sich fragen, ob er durch ein unbedacht gesprochenes Wort die Verletzung eines Wesens bewirkt haben könnte. Drittens: Hat er bei der Almosensuche etwas übersehen? Viertens: Beim Aufheben und Niedersetzen der Gerätschaften? Fünftens: Beim Beseitigen von Unrat?